

「今、私の晴雨計は！③」

「挟まれた国・

ポーランドの悲劇」①

平山征夫

九月中旬、ポーランドを訪れた。

普通ならすぐに旅行記を書くのだが、二か月以上が経ってしまった。ポーランドに行こうと思ったのは、昨年からワルシャワ直行便が出来て便利になったこともあるが、シヨパンの故郷を感じたい、美しい古都で有名なクラクフの町を見たい、そしてその美術館にあるダビンチの「白い貂を抱いた貴婦人」の絵を見たい、など幾つか目的があったが、最大の願いは人類史上最も残虐な出来事と言われる「ホロコースト（ナチス

によるユダヤ民族大虐殺」の行われたアウシュビッツ（ポーランド名はオシフィエンチム、第二収容所ビルゲナウを含む総称）の絶滅収容所を見ておきたいと思っただからだ。

ホロコーストについては、いろいろ本やTV番組を読んだり見たりしてきた。それらを通じてより正確に深く知ろうと務めてきたが、数年前から「収容所に実際に立ってみたいと本当の理解は出来ないのでは？」と思うようになった。一般的にはナチスによる虐殺のための収容施設は「強制収容所」と呼ばれるが、それはユダヤ人以外のポーランド人政治犯、ロマと称されるジプシー、共産主義者のソ連人なども含む収容

施設の総称であり、ユダヤ民族撲滅処分のための収容所はその狙いのまま「絶滅収容所」と呼ばれる。第二次大戦下のポーランドにはアウシュビッツをはじめ六か所に絶滅収容所が設置され、これら収容所での犠牲者は一六〇万人といわれ、その九割がユダヤ人（欧州全体では六〇〇万人が犠牲）だったと言われているが、そもそもナチス側に記録がないうえ、犠牲となったユダヤ人側も家族、親戚が皆殺しとなったケースが多く、生き残った人に確認することも出来ず、正確な数字は永遠に解らないのだ。

アウシュビッツでは、一九四〇年六月一四日から一九四五年一月二七日までの四年七か月の間、

ホロコーストという人類史上例を見ない虐殺が重ねられた。ナチスはポーランド、ハンガリー、チェコ、スロバキアなど近隣地のほか、フランス、オランダ（ドイツ系ユダヤ人でドイツからオランダに逃れていたアンネ・フランクもその一人）、ギリシャ、ノルウェーなどからもユダヤ人をここに移送した。彼らは「移住して新たな生活を始めるのだ」と告げられ、無理やり貨車に乗せられてきたのだ。長い時間立ったままなど劣悪な状態で移送されて来たユダヤ人は、収容所の引き込み線に止まった貨車から下車すると、医師の篩にかけられ、労働に役立たない弱者は女性・子供をはじめ即「ガス室」に送られ、エンジン

の排気ガスや害虫駆除薬で殺され、死体は焼却炉、場合によっては野原で焼かれた。労働に回された男性達の行き着く運命も同じだった。何故「ユダヤ人絶滅」というジェノサイド (genocide: 特定の民族などの絶滅を図る行為) が行われたのかという疑問についても、收容所を訪れてより理不尽な理由が存することを知った。

第一次大戦の過大な賠償金を負わされたドイツ国民は、困窮の中で大きな不満と不安を抱いていた。それを巧みに利用しての上があったのがヒットラー率いるナチス党だった。一九二九年NY市場の株価暴落に端を発した世界恐慌は多くの国に拡散、深刻な失業問題を惹起したが、この頃新

しく唱えられたケインズ型の政府による有効需要創設による景気回復、失業解消に最初に成功したのは、アウトバーン建設を行ったヒトラーだった。人気は一気に高まった。もともとモーゼの「出エジプト記」からユダヤ人は別扱いを受けていたが、ユダヤ教から生まれたキリスト教においてイエス(彼自身もユダヤ人)は救世主であるが、ユダヤ教ではそれを認めていないこと、ローマ帝国にイエスを告訴したのがユダヤ人であったうえ、金貨三〇〇枚でイエスを打ったユダもユダヤ人だったことなどが加わり、独自の宗教と文化を守ろうとするユダヤ教と、新興宗教として勢力拡大に熱心だったキリスト教の間には、

宗教的対立が生じた。以来それが原因でユダヤ人迫害はあった。この時代、ドイツ人が置かれた困窮の中で、銀行家などが多く金銭に拘泥するユダヤ人が比較的裕福だったことにも侮蔑と共に恨みを買った。これらについては、ホロコーストの背景として以前から認識していたが、此処へ来てヒトラーをユダヤ民族絶滅に駆り立てた最大の理由は「ゲルマン民族の権威復活」だったことが解った。コビノー(フランス人外交官)の「人種不平等論」が広く読まれていた時代ではあったが、ヒトラーはこれを悪用し「一番優秀(戦争に強いことが判断基準)なゲルマン人が第一次大戦で敗北したのは、人種分類低位のユダヤ

人が背後で反ドイツ活動をしたからだ。ユダヤを排してゲルマンの栄光を取り戻そう」という理屈付けをし、天才的演説で民族の復活を訴えた。これが一挙に受け入れられ、「ユダヤ民族絶滅」という狂気が沸き起こったのだ。今から思えば信じ難い考えだが、当時からドイツでは敗戦で失ったゲルマン民族栄光を取り戻す、そのためにユダヤ人との混血を排し、民族の浄化を図ろうという狂気は一挙に広がっていったのだ。

キリストの磔刑以来のキリスト教とユダヤ教の対立は、「ユダヤ絶滅」という行き着くところまで行ってしまった。

(平成29年11月29日)